

男女共同参画社会の実現に向けて

らぶらす

Vol. 91
Mar 2026
Take Free

らぶらす Vol.91 Mar 2026

Interview

「分裂」する世界で 私たちは何を失うのか

小説家 村田沙耶香

聞き手・構成：小川たまか

P.5

コラム

栗田隆子

P.6

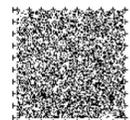
らぶらす講座情報
シングル女性のための
らぶらすよみちクラブ

らぶらす女性のための相談事業

P.7

私の居場所 ～世田谷区で活動する団体紹介～
特定非営利活動法人
せたがや福祉サポートセンター NPOリンク

らぶらす施設紹介



音声コード

この情報誌の表紙には、目の不自由な方などへの情報提供に役立てられている音声コードを印刷しています。「音声コード」は紙に掲載された印刷情報をデジタル情報に変えたシンボルで、約2cm角の中に日本語(漢字かな交じり)で約800文字の情報を記録することができます。専用の活字文字読み上げ装置を使用して音声で内容を読み取ることができます。「音声コード」の横には、視覚障害の方が触覚によりコードの位置を把握できるよう、切り欠きを入れています。

編集・発行：世田谷区生活文化政策推進課 男女共同参画課 2026年3月発行 世田谷区広葉印刷物登録番号/第2441号
〒156-0043 東京都世田谷区松原6-3-5 TEL 03-6304-3453 FAX 03-6304-3710 URL <https://www.city.setagaya.lg.jp/> 制作：株式会社エフエフ

私の居場所 ～世田谷区で活動する団体紹介～

特定非営利活動法人 せたがや福祉サポートセンター NPOリンク

暮らしやすい街を実現するため、女性と連帯し多様な居場所を創ってきました。
理事の光岡明子さんに、
30年に亘るNPOリンクの歩みについてお聞きしました。



理事の光岡明子さんにお話を聞きました。

NPOリンクは2000年4月に設立総会を開催し、10月にNPO法人の認可を受けました。当時、女性はいわゆるシャドウ・ワークの中に閉じ込められてきました。でも、私たちは社会的にもっと能力が発揮できると考えていたから、こんなに閉じ込められていたのかという思いがありました。自主保育を始めたり、女同士の連帯という地域づくりの必要性を実感し、「ひこばえ」という居場所作りから始めました。「幼児から高齢者まで障がいのある人もない人も誰もが集えて、困りごとを皆が共有できる居心地の良い場所づくり(ひこばえスピリッツ)」を目指しました。

NPO法人立ち上げ後は介護保険事業の立ち上げ・撤退(本来事業との2足の草鞋が履けなかった)に続いて、2004年からは第三者評価機関として運営を安定させました。その間も世田谷区NPO法人協議会の立ち上げ事務局・世田谷たすけあいネットの開設・政策提言の会の立ち上げ・男女共同参画課との協働事業(女性のための就労支援バックアップ相談)・市民活動推進課との協働事業(世田谷区内NPO法人調査)・生涯現役推進課との協働事業(リタイア男性の地域活動参加支援)・住宅課との協働事業(お部屋探しサポート&住まいあしん訪問サービス)、まだまだありますが、一貫して求めてきたのは街を暮らしやすくするための新たな仕組みを創り出すことです。

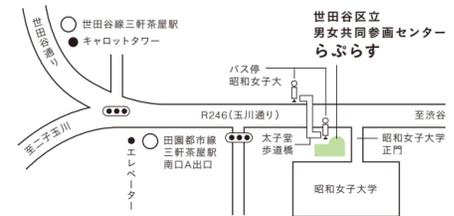
NPOリンクはこれまで30年に亘って課題としてきたことには着手しましたが、残っているのが女性支援です。そもそもの始まりは女性の連帯でしたが、女性の孤立は今も続いています。コロナ以降で増えているのは、生活に困っている、あるいは他の県や区から世田谷区に越してきたが地域の関係がつかず、孤立している高齢の方です。生活の方に不安がなくても、人とつながっていないことによって、情報などが得られず、自分は世間から取り残されているのではないかと不安を感じているという話をききます。困っている人が困っていると言える社会が私たちの求めてきた社会です。困りごとを解決するための仕組み作り、これからも積極的に参加したいと思っています。

NPOリンクHP: <https://setagaya-npolink.jp>

らぶらすは、男女共同参画社会実現のための拠点施設です

世田谷区立男女共同参画センターらぶらす

さまざまな講座・イベントを開催しているほか、生き方や働き方などに関する電話や面接での相談も充実しています。3階情報・交流コーナーは、予約なしで打合せや読書などに使えるスペースで、無料Wi-Fiも整備されています。



〒154-0004 東京都世田谷区太子堂1-12-40
グレート王寿ビル3～5階(受付3階)
TEL 03-6450-8510 FAX 03-6450-8511
<https://laplace-setagaya.net/>

電車：東急田園都市線・世田谷線「三軒茶屋」駅下車徒歩7分
バス：東急バス・小田急バス「昭和女子大」下車
小田急バス(駒沢陸橋～北沢タウンホール)「三軒茶屋」下車
※駐輪場の利用をご希望される場合はらぶらすまでお問合せください



X (旧 Twitter)



Instagram



らぶらすHP



世田谷区HP

情報を探す → 生活情報 → 施設案内 → 生活関連施設 → 男女共同参画 → 男女共同参画センター「らぶらす」のご案内



Interview
Sayaka Murata

「分裂」する世界で 私たちは何を失うのか

聞き手・構成：小川たまか



現代社会の中で、恋愛・結婚・出産とは何なのか。「女性らしさ」や「男性らしさ」を押しつけられるとは、いかなることなのか。村田沙耶香さんの小説は、空想的な設定を用いながらも、私たちが無意識に受け入れている価値観を鋭く照らし出してきました。

2016年に『コンビニ人間』で芥川賞を受賞し、国内外で高い評価を受けてきた村田さんは、約3年半にわたる雑誌連載を経て完成した、初の長期連載作品です。人格をコピーしながら生きる主人公・空子を軸に、分裂する世界、差別、被害と加害といったテーマが重層的に描かれ、刊行直後から大きな反響を呼びました。本作の執筆過程で感じていた「怖さ」や違和感、そして「実験」として小説を書く創作姿勢について、村田さんに話を聞きました。

小説家 村田沙耶香

Profile
1979年千葉県生まれ。玉川大学文学部芸術文化学卒。2003年『授乳』で群像新文学賞(小説部門・優秀作)受賞。2009年『ギンイロノワタ』で野間文芸新人賞、2013年『しろいろの街の、その骨の体温の』で三島賞、2016年『コンビニ人間』で芥川賞、2025年『世界99』で野間文芸賞を受賞。著書に『マウス』『星が吸う水』『ハコブネ』『タダイマトビラ』『殺人出産』『消滅世界』『生命式』『変半身』『丸の内魔法少女ミラクリーナ』『信仰』などがある。

撮影：小山貞弘

人格をコピーする主人公が 映す分裂する世界

雑誌の連載が約3年半。村田さんにとって初めての長期連載だったそうですね。

はい。はじめはそんなに長くなると思っておらず、1年か2年連載して本にしようと言っていたことがもはや懐かしいです。申し訳ないくらい終わらなくて、一生書くのかなとすら途中で思ったのですが、なんとか終わりました。当初の予定では二章の半分くらい、主人公の子どもの時代から分裂した世界を生きているあたりで終わる予定でした。特に上巻がそうなのですが、自分の記憶中枢がごくく刺激される小説で、自分の記憶と絡まり合って膨れる感じが毎月ありました。

主人公の空子は、周囲の人の人格をコピーします。本人がどうい人格なのかは自分でもわからない。対人関係の中でどう振る舞えば良いかわからないから他の人の言動を真似る主人公というのは、『コンビニ人間』でも少し描かれていました。

『コンビニ人間』の主人公は一緒に働いている同年代の女性の靴や洋服のブランドを調べて似た店で買い物することを学びます。人の言動をコピーするというのは『コンビニ人間』ではメインのテーマではなかったのですが、その感覚について言及してくださる方が多くて少し驚きました。私自身は、それまではあまり自覚しておらず書いたこととすこ意識するようになった感覚でした。このことをもっと書きたいと思って別の短編『孵化』を書いて、それも書き足りないと思って今回の長編を書きました。

空子はとても特異なキャラクターに見えますけれども、とはいえそのときに所属している「コミュニティ」としては、キャラや言動を合わせていくのは、多かれ少なかれ誰しもあることだと思います。

そこに焦点を当てているのが面白いなど。

私の場合は、自分の本質でしゃべっていると思うような場所があつて、「本来の自分」というものがあるとしたらその場所が近いのかなという感覚があります。現実にもそういう人が多いとは思っています。とはいえ、いろいろな場所で全く同じ自分であるかというところではなくて、それぞれの場所に適応しています。しゃべり方も変えたりして。

『孵化』という短編では、コミュニティに合わせてキャラクターを変えるところだけにフォーカスしました。それだけでは書き足りなかったのは、世界そのものが分裂している感覚です。それを『世界99』で書きたいと思いました。たぶん、特にSNSの影響があると思うのですが、すこく考えるようになった感覚です。同じニュースを見ても、グループによって全然違うリアクションをしていることがある。無理して合わせている人もいたりとか、人によってグランドポジションはあると思うのですが、その「分裂」する感じに興味を持ちます。

たとえばリアルな人間関係と趣味とでSNSのアカウントを使い分けているときに、タイムラインに流れてくる話題やニュースへの反応がまったく異なることはありますね。

はい。別のタイムラインを覗いたら「あ、こんなに見えてる世界が違っんだ」というようなリアクションがどんどんリツイートされていたり、あるコミュニティの中ではかなり話題になっているのに、別のコミュニティでは誰も気づいていなかったり、その分裂が可視化されていることにソツとして、何か書きたかったのだと思います。たぶん、怖さを感じているのだと思います。空子はどの世界でも並列に適応していて、中身がまったく空っぽのままやっていってしまう。そういう怖さが自分にもある気がしてソツとしているのかもかもしれません。

村田さん自身は、目の前にいる人のしゃべり方になっていくことはあるのですか？

実はあります。幼少期からいろいろあるのですが、大人になってからだだと、すこく内気な性格だったのに、コンビニで働くとき「店員」としての振る舞いになるんですよ。それこそ研修ビデオとかもある中で、そういうのを見て、理想的な笑顔の店員とか、仕草をやってみる。やってみると理想的な店員の声のトーンが出て、そういう存在として扱われる。そういう経験があつて、すこく印象に残っているのだと思います。

今このインタビューでのしゃべり方も、ある編集者さんに初めてお会いしたときその人がこのしゃべり方だったんです。でも精神性が自分と近い人がこのしゃべり方だったなと思って、それから自分も緊張する場面、このしゃべり方になりました。ご本人にこれを言ったら「そんなに似てないかも」とおっしゃっていたので、ちょっと自信がないですすけれども(笑)。

最近仲良くしている小説家の方がコロナ禍に「人間は会うときに細菌だけじゃなくて、考え方やその人が持っている要素を知らず知らずのうちに交換している」というようなことをおっしゃっていて、確かに「一緒にいる人のよく使う言葉をいつの間にか自分もたくさん使うようになったりすることはありますよ。人の要素が伝染してくる」という感覚は、すつと気になっていることかもしれません。

怒りが粉のように 体の中に散らばっている

空子はリアル世界の中では「世界1」から「世界3」までを行き来していると感じています。「世界3」の人たちは、差別や環境破壊に抗議する人たち。いわゆる「ソーシャル・ジャスティス(社会正義)」を求める立場の人たちです。けれどあまりうまくいかず、自己嫌悪もあつて、とてもつらそうです。現実の世界でも、「社会正義」を訴える人は煙たがられる場面も多く、身につまされるどころがありました。

そうですね。私は小説の書き手として「歩引いて眺めているので、空子はどの世界にも感情移入しないで淡々と

Interview

適応しているなあと感じていたのですけれど……、なんだか怖かったです。

途中から「世界4」が出てきますよね。怒ったりしない、穏やかでウサギさんみたいな勢力。私はストーリーを何も考えず、無意識の箱みたいなところを使って書く性質の作家なのですが、フェアにしているつもりでも、穏やかな世界に飲み込まれていくような予感があります。ある瞬間、自分もそちらへ引きずり込まれるような感覚が。個人ではなく世界からとんとん怒りみたいなものがなくなる、というイメージが途中からわりと大きく出てきました。

私はそこそこ恐ろしい光景な気もしたのですが、読んだ人の中には「アンガーマネジメントができて世界で良い」と思いましたと言う方もいました。

私はたぶん、怒りという感情が自分の中から、失われたという感覚があるのだと思います。怒りという感情を幼少期に壊してしまったという感覚があります。少なくともわかりやすいかたちでは存在しなくて、粉のように体の中に散らばって、故障しているように思っています。感情の波動として大事なものだと思っているのに、自分からはうまく出てこない。だから「世界4」の人々が出てきたのかもしれません。

生殖をめぐる想像が見せた別の地獄

村田さんの小説では、恋愛や出産についてが繰り返しテーマとなっています。既存の価値観とはまったく違やかたちの「恋愛」「出産」「生殖」をその都度提示していて、「ディストピアSF」とも言われませんが、完全にSFとも言い切れないような、生々しさを感じます。

視点が違うので、今現在も、もしかしたらこういう世界なのかもしれないと思わされることがあります。

「なもむ」という主人公が全然知らない言葉が大事にされ、怒ることがはや時代遅れになっているという世界のお話ですね。



ありがとうございます。生殖に関してはずっと考えてまいます。「世界99」を書き始めたとき、「ピヨコルン」がいることで、女性ももしかしたら楽になるかも思わないと思いました。(※「ピヨコルン」は架空の動物で、研究が進むに従い、女性に代わって生殖や出産、家事労働を担う存在となる。)

そう思って書いたのですが、特にならなくて……。違う地獄が見えましたね。自分の執筆の仕方だと、出てきてしまったものは書くしかないのですが、渋々というか(笑)、こんな嫌なことを書きたくない、知りたくなかったなと思いがら書いていました。

それから、書いていて結構きつかったのは、母への扱いです。

空子の母は、空子の父や祖父母から家政婦のような扱いを受けていて、若い空子も母のことをまったく尊重しよ

うとしません。若い空子は性的な視線に晒されるなど被害者性が強いですが、大人になってからはピヨコルンや母の存在によって、自分の加害性にも自覚的になっていくところがあります。

私は実際に便利な存在のように扱われる母を、あまり守れなかったという自覚があるので、「こんなこと書きたくないな、しんどいな」と思って書いていました。

小説を書くときは、自分と切り離しているつもりで書くのですが、地下室みたいなところではやっぱりつながって膨れてくる。

デビュー時からそうなのですが、母親という存在はメインのテーマのつもりではなく、ちらっとしか出ないのにとんとん膨れてくるんです。たぶん、小説を本格的に書いた大学生の頃に、すでに「自分は将来こうなるんだよ」と言われる存在としての「家の中の母」への複雑な感情があったのだと思います。

Interview

も人工子宮をつけて産んだり、「消滅世界」では人工施設を作って男性も産むとか。

女性が3人で友愛として家族になって3人で育児を頑張ろうという短編も何度か書いています。こういうふうになつたらもっと幸福な世界になるのでは？という想像をすくしてしまっ、それが作品の中から表れてくるのだと思います。

差別はなぜ生まれるのかを描く試み

『世界99』を「ディストピアSF」と言わしめるキーワードのもう一つが「ラロリン人」の存在です。ラロリン人は一見、人間と同じですが、特殊なDNAを持ち、人間から迫害されています。

人間たちは「ラロリン人が優遇され、自分たちが不遇な目に遭っている」と思い、ラロリン人を差別します。差別を書こうと思われた理由を教えてください。

差別される側もすけれど、する側の感覚も、よほど書きたいのですね。興味があるのだと思います。幼少期から自分の中の差別における加害性にすごく興味があります。倫理から逸脱した好奇心なかもしれないですが。今回は、主人公が差別している姿を書きたかった。差別する理由は特になく「みんながしているから」という理由でめっちゃくちゃ加害者している姿を書きたかったです。

架空の差別にどうかにかについては、すごく悩みました。架空の差別にしたのは、この主人公が「その存在を差別するべき」と刷り込まれたときにどうするのか。それを小説の中で実験してみたかったからです。

差別は現実でもありとあらゆるかたちで複合的に起きていることだと思いますが、空子さんという人がそれをどうするのか、どこかでストップがかかるとか、かからないのか。それを見てみたかったです。

村田さんは執筆について「実験室」「実験」という言葉をよく使われますが、物語の中だからこそできる実験という(こと)でしょうか。

差別における人間の心理の構造を、透명한ガラスの上でしっかりと見ることをしてみたかったんです。差別についてはまだ書き切れていないので、またこのテーマを選ぶかもしれませんが、こんなものではないはず、もっと残酷なはずだと思っからです。今回は生殖などのほうにテーマの比重があつたので。差別についてはもっと、それこそもう書きたくもない、見たくもないような出来事が作品の中で起こり得ると思います。

自分は、普段は差別している人の差別的行動を見て批判しています。でも、その根っこ部分を解剖しないと見られない部分を見たのだと思います。

自分の中にもある差別の感情、その根源を知りたいという(こと)でしょうか。

例えば幼少期の自分は知識がなくてこんなにひどいことをしていた、という過去があつたとして、その自分を切り裂いて裁くとか、切り裂いてそれを見るというのも好きなのですが、それだけでは足りないんですね。

もっとも根っこ部分、もっとおぞましい人間の動きを見た。こんなおかしな「自己分析への異常執着」は持たない方が良いでしょう。持たない方が良いのかと思うときもあります。

村田さんの「実験室」という考え方が面白いなと思っいて、その実験室の中で人間の倫理を掘り下げているように感じます。

その掘り下げて辿り着くものが、あまり知られていない現実をすくい取っているようにも見えます。

おっしゃるように、実験室で人間を見たい、知りたいです。自分の記憶も使って自分を解剖していきたい気持ちもあります。

他の作品で書き切れていないことが次の作品の原動力になることが多くて、今書いている作品もそうなのですが、「よっぽど書きたいこと」という強い感じでもないんですよね。ただ突き動かされるなど。



らぶらす
講座情報

シングル女性のための らぶらすよりみちクラブ 開催!

シングル女性の集いの場らぶらすよりみちクラブ

らぶらすよりみちクラブは、40～50代のシングル女性を対象にした集まり。シングルならではの話題について、気兼ねなく話せて情報交換できる会です。

同世代の女性同士が気軽に交流

2025年度には4回開催し、うち3回は食事会でした。区内人気店のおいしいお弁当を食べながら、仕事や健康、最近の困りごと、ジェンダーについて思うことなどをわいわいおしゃべりし、シングルならではの立場を共有。地域で活動する方が進行役を務め、地元の話題も豊富に出ました。もう1回は「こころからだにやさしい働き方」について考える講座&交流会を開催。生き方や働き方が急速に多様化したこれまでの社会状況を振り返り、これから先の働き方を展望する会となりました。

シングル女性が集うらぶらすよりみちクラブ。
今後の開催情報は、らぶらすのホームページをご参照ください!

シングル女性のためのらぶらすよりみちクラブ

対象	40～50代のシングル女性 ※シングルマザーの方を除く。シングルマザーの方は、らぶらすの「シンママカフェ～シングルマザーのためのグループ相談会～」でお待ちしています
参加費	無料
会場	世田谷区立男女共同参画センターらぶらす



〈参加者の声〉

子どものいないシングル女性向けのサポートは
ほぼ目にすることがなかったため、とてもうれしく思いました。

40～50代の女性のモヤモヤが共有できました。

同じ年代の同じ境遇の方々と
お話しできて良かったです。



同世代のシングル女性が集まって、気兼ねなく話せる場です。



会場には、らぶらす図書室からの選書を展示。



食事会では、下北沢「かまいキッチン」のお弁当が大好評!

らぶらす女性のための相談事業

女性のための悩みごと・DV相談

家庭、人間関係、生き方などのさまざまな問題や、配偶者やパートナー、恋人などからの暴力やモラルハラスメントについて悩む女性のための相談です。ひとりでも悩まず、ご相談ください。相談は無料、秘密は厳守します。

〈火・木曜日〉12:00～16:00/17:00～20:00
〈水・土・日曜日〉10:00～13:00/14:00～16:00
TEL 03-6804-0815/メール/LINE

※予約不要。急ぎのときは電話相談へ
※面接相談希望の場合は、電話相談から予約

女性のための起業・経営相談

起業・経営についての個別相談です。あなたの起業を具体的に進めるために、事業計画の立て方から、資金調達、起業資金・融資制度の手続きまで、創業支援の専門家起業・経営に関するさまざまな相談に応じます。

〈第4木曜日〉下記の時間帯から各45分
①13:00 ②14:00 ③15:30 ④16:30

※要予約。お申し込みフォーム、または電話、FAXから
※予約は当月1日(1月は5日)10:00から相談日前日の17:00まで

女性のための働き方サポート相談

ライフステージに応じた女性のための働き方・キャリアについての面接・電話相談です。転職・再就職など就職活動や職場での悩み、子育て・介護との両立、キャリアアップなど仕事に関わる相談に産業カウンセラー・キャリアカウンセラーが応じます。

〈第1・3火曜日、第2・4土曜日〉下記の時間帯から各45分
①10:00 ②11:00 ③12:00 ④14:00 ⑤15:00

※要予約。お申し込みフォーム、または電話、FAXから
※予約は相談日の前月1日(1月は5日)10:00から相談日前日の17:00まで



取組内容について、詳しくはらぶらすホームページをご覧ください
https://laplace-setagaya.net/



栗田隆子

「今の社会にハマれない私が、ハマっている“お笑い”について」

コラム



2025年12月。これを書いている時点で笑えないことばかり起きている。過労死が世界で通じる言葉になつて久しい。そしてますます多くの人が労働を巡って悲鳴を上げているなか、「働いて×××」などという高市早苗首相の所信表明が流行語大賞になってしまった。また、高市早苗首相の不用意(としか)と思えない発言で中国との関係に緊張が走った。まったく笑えない。笑えないなかで、いま私がハマっているのは、「お笑い芸人をウオッチすること」なのである。テレビがないので、お笑い番組を見るのができないが、ライブの舞台に出かけたり、果ては芸人のバスターなどまで参加している。

お笑い、といえはダウンタウンの松本人志氏が性暴力を告発されてテレビから姿を消したのち配信サービスで復活したというのもまた笑えないが、この人物がテレビから消えた後の若手のお笑い芸人をウオッチすることにハマっているのである。そしてそれを見ながら家父長制から距離を置く笑いとかなんだろう、とずっと考えることにハマっているのだ。

というか、私は小さい頃実は落語家になりたいと思つて、「面白い」ことが大好きである。トークイベントでの私の話は面白いといってくださる方は多い。ことさら笑いを取るつもりはない。だが、昔の竹中直人氏の「怒りながら笑う人」のコントではないが、怒りと笑いの中に同居しているところがある。

とはいえ、お笑い業界は男性中心の世界である。漫才コンテストM・1で女性コンビのヨネダ2000が2022年以降の再度の決勝進出を今年に逃したが、2025年12月9日時点で女性コンビが優勝したことはない。M・1とはまた別に女性だけの大会W・1というものがあることも考えさせられる。またNHK新人落語大賞で桂二葉氏が大賞を獲得した際は非常に話題になったが、それも落語の世界を含め、お笑いの世界が男性中心であることあらわれといっている。

そういう意味で、面白いことが好きであるものダウンタウンなどが作り上げてきたお笑いはいわゆる苦手であった。いわゆる弄る(イジ)る、男性同士で徒党を組む感じが、自分の経験した教室のいじめを想起させたからだ。さらに「オレたちひょうきん族」と「ねるねるのみ」のおかけで、「めっちゃイケてるッ!」といった数々の番組を牽引してきたフジテレビのトップは、タレントの性暴力に追加してきた責任をとって辞任した。このトップが元はお笑い番組のプロデューサーをしていたことを考えると、お笑いの負の部分——人を蔑むときにできる笑い、冷笑や嘲笑というものを意識する。笑いは決して無条件にいい存在ではない。

それでも少しづつ、ブス弄り・やめる、セクハラで笑いを取らない、など変わろうとしてきている部分もある。今後、家父長的な価値観から日本のお笑いほどのような距離を置くのか、家父長的なものに留まるのかを私はじつと注視している。

そういえば、社会問題について発言しだしたウーマンラッシュアワーの村本大輔氏は、自分を使わなくなった日本を飛び出し、二人で話す掛け合いの漫才ではなく、スタンダップコメディをはじめた。漫才のような仲間同士の喋りのなかの笑いでなく、一人で不特定多数に話しかけるスタンダップの笑いは、他の国ではスタンダードだが日本では少ない。「ピン芸人」という存在はいるし、そこで頂点を競うR・1というコンテストもあるが、漫才よりはマイナーだ。またスタンダップコメディでは主流の、権力を持つ人を笑う「風刺」というものも、今の日本のお笑いには乏しい。

社会を風刺する笑いと何か、フェミニストが笑いを楽しむとは何かを考えることは、落語家にならなかつた私が、違う形で面白いことを語りたいという、自分の夢を叶えようとしていることなのかもしれない。そしてそれが今、私がお笑い注視することにハマっている理由なのかもしれない。

お笑いといふことは、いわば社会の悪に向き合うのにも等しいと思つている。

栗田隆子 Ryuko Kurita / Profile

1973年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程中退後、非常勤職のかたわら女性の貧困・労働問題を中心にメディアで発言。現在は塾講師の傍ら文筆家として活動中。著書に『「働けない」とことん考えてみた。』(平凡社 2025年)ほか。



らぶらすライブラリー 所蔵案内

Laplace Library

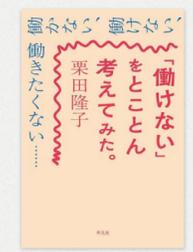
らぶらすで栗田隆子さんの著書が
読めます、借りられます!



『ぼそぼそ声のフェミニズム』
作品社/2019年5月



『ハマれないまま、生きてます』
創元社/2024年5月



『「働けない」とことん考えてみた。』
平凡社/2025年2月

